

明治四十四年三月

何時であつたか、松本の金さん！——金伯父さん
 と言ひたいが、迂潤那麽事を言はうものなら頭から
 叱られる——と歌舞伎座で、團藏の太閤記十段目を
 見物した事がある、その時、己う幕が終らうと言ふ
 所で、光秀が「互ひの運は天王山、先づそれまで
 は・・・」と言つて、右手に持つたる太刀を
 左手に持ち替へる型を演つた。別に是と言ふ働きが
 ある譯でも無く、臺詞があるので無いが、見て居
 た金さん、思はず感歎の聲を發して、「あゝ、實に
 鍛錬した藝だ」と言つた。是が則ち藝の眞味で、此
 簡単な型の中には大軍を腕に提げる意味も含まれて
 居れば、軍國を掌握するの象も現はれて居る、私が
 言ふと些と妙だが、畢竟藝の象徴的な點で、全精神
 の籠る所、藝の絶頂とでも申すのでせうな、所詮八
 百歳などの松永い太膳が大長刀を舞臺一杯に振り散
 らかす藝の比ではない、が、然し芝居で恂う云ふ藝

を見るのは極めて稀である。

處が、能となると藝の全部が皆これで行く、いや、此程度まで鍛錬を積まなければ、第一舞臺に上ること、を許されぬのである。理想を主とする藝術、象徴的の藝術と言ふも畢竟此點からの謂ひで、嚴格な規律があつて、藝も舞臺も立派に統一が保たれて居る。殊に、他流は知らず、寶生流には深川と言ふ名家があつて、流儀を提げて立つて居る、人格は高し、見識はあり、御承知の通り當世の人で無い、藝は元より申す迄もな　く天稟である、故人金五郎の脇で鉢の木を演つたのを見たが、脇の時頼入道が、あの橋懸りに墨染の衣で、悄然とイむ姿——決して悄然として居る譯ではない、堂々たる態度で又ツトインで居るのだが、そこは藝の妙境、自ら人をして、日暮れ大雪に前後を忘じたる旅僧の影を偲ばせる——を熟と見送つて、なう／＼旅人、御宿参らせうと呼び懸けた時の、糞れて而も凜とした常世の趣、今でも猶目の前に髣髴する、それが別に芝居の様な切りこまざいた紙を降らす譯でもない、が、何となく、森々とした御山路の薄暮、白皚々の景を點出する。

私わたくしは随ずい分ぶん雪ゆきの山やま路ぢを迷まよつた事こともあるが、未まだ、あの鉢はちの木きの時とき程ほど、雪ゆきの景けいを切せつ實じつに感かんじた事ことが無なかつた。而しかして此このシテ、ワキの距き離りに一分ぶ一りん厘さの差さがあつても、ならぬと言いふに至いたつては、藝げいの嚴げん肅しゆくなるに驚おどろかざるを得えない。

話はなしは少すこし違ちがふが、つい先せん達だつて、晝ひる飯めしを濟すまさうと
して・・・勿ち論ろん御ご存ぞんじの通とほり、私わたしの懷ふところ合あひの事ことだ
から好いい所ところへは入はいれませぬ、そこで例れいの食しょく傷やう新しん道みちの
「初はつ音ね」へ飛とび込こんだと思おもひ給たまへ。すると、二三二
間げん離はなれた所ところに一寸ちよつと薄うす羽は織おりを着きた、木き場ば邊へんの若わか旦だん那な
しいのが二人ふたり、鍋なべを差さ向むかひに陣ちん取とつて居あた。己もう大だい
分ぶ食まられた體ていではあるが、お忍しのびらしい殊しゆ勝しょうなもの。
此こ方ちの方ほうが却かへつて大おほ胡あく坐くら、其その邊へんは然しかるべく御ご推すい察さつ
を願ねがひたい。さて何なんの氣きなしにその御ご兩りやう人にんの話はなしを聞き
くと、「何どうだらう、世せ間けんの事ことア、大たい抵たいの事ことなら自じ
由うになる、金かねさへ積つめば、と思おもつて居あたら大おほ當あて違ちが
ひさ、あの寶ほう生じやうのお爺ぢいさん計はかりは何どうあつても動うごき
相さうな様やう子すも無ない、私わたしもホトノ、手て古こ摺ずつたよ」と言い
ふ、ハ、ア先せん生せい素しろ人との稽けい古こと出で懸かけて斷ことわられたな、
さもさうずと、可を笑かしかつたが、一寸ちよつと路みち傍ばたで聞きく話はなし

ですらこれである。以て九郎翁の人柄が思ひやられるでせう。これが又、今は己う居ないが、お女房さんが吉原の花魁で、家では左袂を取つて居ようと言ふのだから、一寸岡惚れせざるを得ないぢやありませんか。

金五郎と言ふのが、又人の知つた名人で、元より脇師であるから、一體に嚴肅で、且質實ではあるが、紅葉狩の様なものになると、不思議なもので、體に恐ろしく色氣が附く。色氣と言つたつてベタ／＼する様なのではない、言はず艶ですな、勿論余呉將軍維茂が鬼女に惚れる所ですから、十分色氣があつて然るべきだが、あの鬼女と揃み合ふ一恚麼言葉を使つては御能の方では叱られるかも知れないがー所など、全く嚴肅な底に、言ひ様のない色氣があつて、見惚れる程美しいものであつた、これが爲めシテ方の鬼女の美しさは一層の美しさを添へ、後に至つての恐しさも一層深くなるのだらうと思ふ。

其點では今の新などは未だ藝が堅過ぎる様である、脇で最も重んずる張良を演るにしても、金五郎のは

まったく沓と共に足が流れる様に感ぜられたが、新のは足を自分で流す様の感がある、勿論これは金五郎と比較しての事で、新の価値には関係の無い事だ
が・・・・・

紅葉狩の次手に最う一つ言つて置きたい、それは
雛子方の巧拙が能の出来榮えに大關係を有する事である。私はさる名家の此能を二度見た事がある。最初の時は、維茂が菊の酒に酔つてトロ／＼とまどろみかゝる時、シテなる鬼女が、華やかに舞ひながら、ジロリと一目、ワキ方を見込む所があるが、その物凄さ、殆ど鬼氣人に迫るの趣があつた。然るに第二回目に見た時には同じ人が同じ型を、勿論同じ心で演つたのであらうが、恐しい所か、何の感じも受けなかつた。不思議に思つて、後に聞いて見ると、果せる哉、その時御雛子の方で、手を間違へた者があつたと言ふ。

雛子方と言へば昔は、あの猿樂町の曲り角の所まで行くと、心のしまる様な、調べの音が、冴えて聞えたものであつたが、當節は薩ツ張り響かなくなつ

た。これは囃子方が衰へた爲だらうか、・・・
・・・・いや、それは違ふ、事新しく申す迄もな
く、蓋四邊が物騒がしくなつた爲めでせうな。

が、近頃は五郎などと言ふ、名手も出来た事、殊
にその道の人々が、大分骨を折られて居る様であるか
ら、案じることはありますまい、この五郎と言ふの
は、浅草邊のさる露地口で、ステツキで拍子を取りな
がら、唱歌を歌つて居る所を、錦吾翁が不圖通り合
はせ、多時耳を傾けて居たが、此子教ふべしとして、
遂に貰つて育て上げたのだと言ふ、藝術家としては
面白い話だ、人から聞いただけで事實か否かは確め
ぬが、私は切にその事實ならん事を希望する。藝術
にとつて天才の發見程大いなる意義を有するものは
無い。

才人の事で思ひ出したが、寶生流に瀬尾要と言ふ
のがあつた。一體寶生の若手連は遠眼鏡の尻から九
郎の藝を窺いた格で、小さい九郎が幾人も動いて居
る様なものであるが、この瀬尾要には此仲間に見る
事の出来ない一種の特徴があつて、單に模倣のみで

ない、個性から流れ出る犯すべからざる藝の力が見えた。何しろ猿樂町の舞臺の鄰りで生れて乳呑みの頃から舞臺を這ひ廻つて、叩き込んだ藝であるから、たしかな腕で、同じ型を遣るにしても、自ら氣品が溢れて居たが、才人は多く放縦で、我儘が過ぎるものである、藝は惜しいが、他の者の見せしめ、規律の前には如何とも致し難く、遂／＼破門されて御勘氣の身の上となつた、今は何處に居る事やら、流儀の上からは勿論、斯道の爲に痛惜に堪へぬ所、この人などは誰か、斯道の熱心家が、九郎翁の意を和めて、勘當の許される様に取り計つて戴き度い。而して、再びそのキビ／＼した藝をあの舞臺に見たいものと切に思ふ。

然し藝の神に入つた時は、誠に恐しいもので、金五郎が望月の脇をした時、前言つた要が子形を勤めたが、脇が迫き込んで、「何と・・・」と太刀の柄に手を懸けて詰め寄る、その意氣込みに驚いて、ウエ、エーとベソを掻いたと言ふ話がある、蓋し後世に傳ふべき美談だと思ふ。

それから凄^{すこ}いのは能^{のう}の幽^{いっ}霊^{れい}である。時代^{じだい}は已^もう幽^{いっ}霊^{れい}などに對^{たい}する信^{しん}仰^{かう}ほ失^つつて居^あるが、これが藝^{げい}の力^{ちから}とも言^いふのであらう、幽^{いっ}霊^{れい}は信^{しん}ぜずとも藝^{げい}に確^か乎^こたる信^{しん}念^{ねん}がある、消^きえにけり幽^{いっ}霊^{れい}いまだ橋^{はし}懸^がり、と川^{せんり}柳^{ゆう}では言^いふものゝ、あの橋^{はし}懸^がりをノソノと退^{しり}く姿^{すがた}は、實^{じつ}に凄^{せい}凄^{せう}なもので、他^たの演^{えん}藝^{げい}では所^{しよ}詮^{せん}見^みられぬ所^{ところ}である。

噺^{はやし}子の巧^{こう}拙^{せつ}が能^{のう}の氣^き品^{ひん}に至^し大^{だい}の關^{くわん}係^{けい}のある事^{こと}は前^{まへ}に言^いつたが、あの狂^{きやう}言^{げん}が又^{また}頗^{すこ}る大^{だい}切^{せつ}なもので、その技^ぎの如^い何^{いかん}は直^たちに能^{のう}の全^{ぜん}局^{きよく}に係^かはつて居^ある。然^{しか}し近^{ちか}頃^{こう}の狂^{きやう}言^{げん}はテンでお話^{はな}になりませぬ、江^え戸^ど前^{まへ}の茶^{ちや}番^{ばん}の方が遙^{はう}かにその上^{うへ}に居^ある、と言^いつても好^いいでせう、あれぢや見^{けん}物^{ぶつ}に馬^ば鹿^かにされ、無^なくもがなと思^{おも}はれるのも仕^{しか}たがない。船^{ふな}辨^{べん}慶^{けい}の船^{せん}頭^{とう}などは殊^{こと}に眼^め立^だつて見^み苦^{くる}しい、シーツと言^いふ懸^{かけ}聲^{こゑ}と、波^{なみ}よノと言^いふ所^{ところ}で、武^む庫^こ山^ま嵐^{あらし}の光^{くわう}景^{けい}を現^{あらは}すのだが、此^{この}頃^{こう}の様^{やう}では波^{なみ}よノが波^{なみ}右^{みぎ}衛^{ゑい}門^{もん}と言^いふ船^{せん}頭^{とう}でも呼^よんで居^ある位^{くらゐ}にししか思^{おも}はれぬ。悪^{わる}くすると廂^{ひさし}髪^{かみ}の女^{ぢよ}學^{がく}生^{せい}等^{など}は何^な故^げ、浪^{なみ}さんよ、と言^いはぬのだらうと不^ふ審^{しん}がる位^{くらゐ}が落^おちてある。間^{あひ}語^{がた}りとてもその通^{とほ}り、あれが巧^{たく}妙^{みょう}であつた

なら、衣裳替の時間塞ぎと、嘲笑される所は無。

今は舞臺を退いたが、高島彌五郎は、近時狂言界に於ける第一人でせうな。この藝は能役者までが一寸臆病口から窺き見ると言ふ程で、其技眞に迫る所があつた、其話が面白い、先刻御承知でもあらうが、あの「鬼瓦」——これは狂言の方では餘り重くはないものですが、京の六角堂の鬼瓦を見て、國許の妻女の事を想ひ起し、落涙に及ぶと言ふ筋、これが美人の錦繪でも見て、不圖愛妻を思ふのなら兎に角、鬼瓦であるから、事頗る面倒である、だがそれが眞實だ、この感情を極めて眞率に現すのは並大抵の事では無いと話しましたが、尤もな事で、今の狂言師などはテンでこの馬鹿げた、而も極めて眞面目な感情を、初めから馬鹿氣たものだとして取り扱つて居る、藝の薄ッペチなものだとして「これは此邊りの者で御座る」と言つた所が、矢張り何の某と言ふ狂言師で、決して此邊の者にはなつて居らぬ。「人か杭か」と言ふ狂言にしても同じ事、人で居ながら杭、々、と言ふのだから、その呼吸がむづかしいの

だ。

其處へ行くと彌五郎老人のなどは立派なもので、「これは狸で御座る」とイキナリ現れても、正に狸となつて居る、高島彌五郎が消えて、藝そのものゝみが残る。

近頃世間で女優などゝ騒いで居るが、此の藝の極致から見れば、何の價値も無いやうに思はれる。成程現代の女學生にでも扮するのなら知らぬこと、天人などを演らせて御覽なさい、テンデ地上から、足は一寸も離れちや居ませんや、其處は面を着けて、皺だらけな手で好いから静々と出られて御見なさい、迦陵頻伽の聲が聞えて、霓裳羽衣の曲、自にして眼前に髣髴する。

次手だから最、一つ言ひませう。能の見物は人柄にもなく何故あゝ無作法な人が多いのでせう。芝居などは趣味が低いに係はらず、大向うの八的熊的の末に至るまで、それ／＼公德があつて、殊勝に見物して居るのに、能の見物と來ると、實に亂雑なも

のがある、殊ことに辨當べんたうの時ときなどには、宛まるるで美味びみを口くち
にした事ことのない、お百姓衆ひやくしやうじゆうの態度かたちで、先祖せんぞが佐々木ささき
かと思おもふほど先さきを争あらしつて、その取とり合あひをやる、藝げいじ
術じゆつを傷きずける見み苦くるしい事ことだと思おもふ。

以上いじやうは唯たゞザツと思おもひ浮うかんだ儘まゝを述のべただけで、能のう
樂がくの價か値ちも名家めいががあつて初はじめて、その貴たふとさが解わかるの
である。現げん在ざいから推おして、將しやう來らいに思おもひ至いたると、又また自おのづか
ら考かんがへは違ちがひます。何なんとなく案あんじられるのは、私わたし一ひと
人りのみではありませんまい。